

マルコ・マリ・ド・ロ神父

崇高な精神で人々を希望へと導いた愛の道

一八六八年、長崎へ派遣されたパリ外国宣教会のド・ロ神父は、人類愛とフロンティア精神をもって、生涯人々のために力を尽くした。産業、社会福祉、印刷、土木・建築、医療、教育文化など多方面にわたる知識や技術とともに、彼が伝えたのは限りない愛と希望の精神であった。



日本人司祭を育成するための
羅典神学校を設計

なじみやすい宗教書の出版

私財を投じて取り組んだ
様々な事業

大浦天主堂での「信徒発見」のあと、信仰を表明して訪れる信者たちのために、司祭館の天井裏では密かに礼拝や学習が行われた。「無原罪の御孕りの間」と呼ばれたこの秘密の仮聖堂が長崎公教神学校の前身で、司祭になる見込みのある若者をおくまい、教育していた。現在、大浦天主堂横にある木造の建物はこの神学校の校舎として、一八七五年、ド・ロ神父の設計・監督によって建てられた。講義はすべてラテン語で行われたことから「羅典神学校」といわれ、ここで学んだ神学生たちが開国後初の日本人司祭となったのである。

※一八六五年三月十七日、厳しいキリシタン禁制のなかで、約二五〇年間信仰を守り続けてきた浦上キリシタンが大浦天主堂を訪れ、信徒であることをプチジャン神父に打ち明けた歴史的な出来事。

「日本で使う宗教書は漢訳ではなく、信者になじみのあるキリシタン用語にすべきである」という主張したプチジャン神父の意志を受け継いだのがド・ロ神父だった。司祭館に印刷所をつくって宗教書を出版するが、明治の宗教弾圧で中断を余儀なくされる。その後、横浜への転任を経て再び長崎に戻ったド・ロ神父は、日本における近代活版印刷の祖 本木昌造が鑄造した活字を購入して印刷を再開。一八七八年、ほとんど漢字を使わない「オラシヨ並ニラシヘ」をつくり、翌年、外海に赴任した。

外海にやってきたド・ロ神父は、困窮を極める村人を救うため、献身的に力を注いだ。女性が自活するための仕事場として救助院をつくり、染物・機織り・搾油の技術や、パン・マカロニ・そうめんの製法、読み書きや算術などを教えた。また、出津教会や大野教会を建築し、開墾や道路などの土木工事指導、福祉や医療活動にも私財を投じて取り組んだ。長崎に赴任してから一度もフランスへ帰ることはなかったド・ロ神父。一九一四年に亡くなるまでその大半を外海で過ごし、人々の心と暮らしを支えた。彼の魂は、今も出津の共同墓地に静かに眠っている。



今も外海に残る教会堂やド・ロさまそうめん—
それはド・ロ神父が多くの人々に捧げた愛の証。
その奉仕の精神は、数多くの遺構とともに現代に受け継がれている。

ド・ロ神父遺跡(長崎市外海)

六兵衛 (島原半島)



寛政四年(一七九二年)、突然、島原地方を大地震が襲い、眉山が崩壊。有明海に達した大量の土砂の衝撃によって発生した巨大な津波は、対岸の肥後国(熊本県)を飲み込んだ。いわゆる「島原大変 肥後迷惑」である。

その後、島原地方はこの未曾有の災害によって大飢饉に見舞われた。このとき、深江村(現在の南島原市深江町)の名主・六兵衛が食糧難から人々を救うために、当時の保存食だったサツマイモの粉を食べる方法として考案したのが、島原地方に伝わる郷土料理「六兵衛」である。

「六兵衛」の特徴はそのつくり方にある。干したサツマイモの粉をお湯でこね、つなぎに山芋を加えてつくった生地を「六兵衛突き」と呼ばれる穴の開いた金属板にのせ、押し出しながら熱湯の中に入れて茹でる。茹であがったら、醤油味のだし汁に、薬味のねぎを添えて食べるといふ素朴な料理。太くて短い麺は弾力があり、ほのかにサツマイモの甘さが口に広がる。

苦境を乗り越えた先人たちの知恵が息づく「六兵衛」。その懐かしいふるさとの味をぜひご賞味いただきたい。



六兵衛突き